

# 作文と解釈行為

中川正弘

## 0.0 はじめに

「作文」の問題についてはこれまでも論じてきた。例えば、「作文」という言語の運用練習が言語の習得にとってきわめて有効なものであることは誰にも認められていながら、これが授業外の補助練習以上にはなかなか取り入れられないのはどうしてなのか。そして、書かせるための「作文の書き方」の講義や説明ではどうしてもテーマとか論旨の組み立て方のような内容レベルの問題しか扱えないこと。また、作文練習は文章が書かれた後の扱いにこそ決定的な意味があることなどである。そして、言語の学習、習得に不可欠な言葉そのものの問題、言葉の最表層部における意味現象に焦点を当てた授業設定の可能性なども考察してみた。その際、文法や言葉遣いを「正しい／誤り」という基準でのみ見る視点を問題とし、白黒がはっきりしていると見える正用、誤用だけではなく、どちらとも附かない表現まで扱うことが必要であり、それが可能な視点として「文体」を取り上げた。<sup>1)</sup>

そして、試みとして、一般的に行われている間違い訂正を朱で書き加える添削ではなく、少々手間はかかるが日本語らしい文章として不自然なところがなく、文体上の調和が得られる程度まで書き直した別版を作成したうえで、オリジナル版とこの書き直し版の比較解説を骨子とする授業を考えた。それは、間違いを訂正するだけの通常の添削をする場合でも、間違いとは言えないところまで手を加える書き直しをする場合でも、学習者にとってきわめて有用なものに違いないはずなのだが、紙面の余白には書き込むことができないさまざまな「情報」を提示できる機会をなんとか設けたいと考えたからであった。

添削をする時、作文を読みながら私たちはいろんなことを感じ、考えるものだが、そういったものを、最終的に何をどう書き込むかを決定するためのただの準備段階に属する雑多な材料と見なして、ことが終われば忘れてしまうというのではあまりにも惜しい。学習者にとって、自分の書いた文章を読んでいる添削者の意識に去来することすべてが、潜在的には目標としている言語能力の要件となっているはずであり、こうしたものが学習者に生々しく提示される場が設定されてしかるべきだ。正しいか、誤っているかの判定だけではなく、その「ことば」が母国語話者の脳裏にどのような意味、感覚を喚起し、どのような記憶を呼び覚ますのか、また、ことばの被膜越しに「内容」を解読した後、その「内容」にふさわしい文体を添削者が自分自身の言葉遣いでまとわせた時に、言葉を選ぶ主体としてどのようなことを考えたか、このようなものを公開することにためらいがないではない。一般的に、教師の説明や解説はできるだけ客観的であるほうが良いと考えられ、迷いや思

考錯誤という不確かな過程を公開せずに論証可能な解釈や分析の結果だけを示そうとするものだからだ。しかし、考えてみればどんな現象の考察でも、不確実な要素を無視し、確実な要素だけで考察すれば客観的でも厳密でもなくなってしまう。不確実な要素を含めての現象であれば、不確実なものをその限りで見据えることも必要だ。

## 1.0 作文の解釈

外国語を学んでいる成人学習者がその外国語で作文を書こうとする時、無理をせずに自分の能力レベルに合わせて書くというのは難しい。当然のことであるが、母語においては言語に関わる知覚運動能力、言語知識、思考力がバランスを保ちながら（あるいは一体として）獲得されており、母語での作文では内容と言葉がぴったりと重なり合ったものとなりやすい。

これに対して、すでに母語での思考形式が定着している外国語学習者の場合には、その外国語の知識、能力に欠落が多いことから、また母語を使って考えた内容をその外国語に翻訳する場合が多いことから、書き上げられた文章の言葉と内容は二つの言語に関わることに起因するずれをいたるところで見せることになる。

したがって、そういった作文では、内容のレベルにはほとんど欠陥や問題がないにもかかわらず、言葉のレベルにおいてだけ異常がいろいろと観察されるのである。そして、学習者が表わそうとした内容を解説し、これを念頭に置いて言葉の最表層の「起伏」や「紋様」を子細に見ていく時、言葉の向こうに理解している内容とは別に、言葉そのものの表現性を、言葉そのものが発する意味をもう一つの内容として感じたり、そのような言葉を用いる学習者の文化背景やこれまでの学習の問題点などさまざまなものを推測したりするものだ。

さて、添削において朱で書きこまれたこと、これも当然読む行為となんらかの思考を経たものである。朱書きされたことしか添削者の意識に浮かばなかったはずがなく、添削で書き込まれたことはいつでも添削者の意識行為のごく一部を示すものでしかない。

だれが添削を行っても結果としての書き込み方が同じになるような間違い箇所も確かにあるだろう。しかし、結果として現われた書き込みが同じだとしても、そこにいたるまでの思考過程までが同じとは限らない。文字の間違い、「てにをは」の間違い一つの書き直しにしても、その間違いという判定をくだす前に添削者はさまざまなことを考え、その判定の後も、たとえば、どのような書き込みをするかと検討するものだからだ。

はっきりと目に見えるものはこれらしかないからといって、作文と添削文という二つのテキストだけで考えていては、「作文」という学習手段、教育手段の可能性は見えてこない。二つのテキストの蔭でこれまで見過ごされていたもの、ほとんど定着されることなくつぎつぎと生起しては消えていっていた意識の動きがどのようなものであるか、これを知

ることが必要だ。

## 1.2 誤りの判定と画定

文体まで手を加えるつもりでの添削であっても真っ先に手をつけようとするのはやはり言葉の間違いである。朱で抹消すべきところを文章中から見つけ出せばそれでよいのだが、そんなに単純なものでもない。例えば、「知りたかったなのです」のように構造が確定している表現の内部において構成要素の異常がある場合には抹消箇所<sup>①</sup>に迷うことはない。

ところが、「中華料理店のアルバイトを1週間手伝いにいきました」のような場合はどうだろうか。「手伝いにいきました」を抹消し「中華料理店のアルバイトを1週間しました」と書き直せば、そこだけが間違いだと扱うことになるが、「のアルバイト」を抹消し、「中華料理店を1週間手伝いにいきました」とすれば「手伝いにいきました」は間違っていないと扱うことになる。あるいは、若干不安定な文ではあるが、「中華料理店のアルバイトを」を「中華料理店をアルバイトで」に変えれば、助詞二つだけの最小限の抹消で済ませられなくもない。ここでは、抹消の仕方が3通りあり、それぞれ誤りの画定が違っていることになる。

また、「お茶をコップになみなみと注ぎました」のような文が出てきた時、この文自体にはなんら誤りはなく、「コップ」ではなく「湯のみ」ではないのかと思えても、特に他にかみ合わない材料がなければ抹消はしにくい。

誤りかどうかの判断、また誤りならどこを抹消するかという判断はこのように揺らぐことも少なくない。

## 1.3 訂正、書き直しのヴァリエーション

抹消するだけで済ませられることもあるが、添削ではたいていはその横に書き直される。そして、その書き直し方が一通りしか浮かばない場合もなくはないが、可能な書き換えが何通りか考えられ、その中から一つを選ばなければならないことも多い。文章中のある地点にそこで可能な表現の選択肢を幾つも書き込むようなことは普通はしないだろう。

例えば、「ある日、禅偉い人が大学先生の訪問を受けた」のような文で、「禅偉い人」も「大学先生」も明らかに間違っている。そこでこれらを抹消して書き変える可能性はそれぞれ「禅宗の偉いお坊様／禅宗の偉い坊さん／禅宗の偉い僧侶／偉い禅僧／高名な禅僧／・・・」、「大学教授／大学者／大先生／大学者先生／・・・」といろいろ考えられる。このような選択肢はふつう同義、あるいは類義表現としてどれを使ってもいいと説明されるだろうが、一般的に、このような同義語や類義語の使い分けこそ学習者が知りたいと願っているものである。

「これらは同義語であって、どれを使ってもいい」という言い方をすることが多いかもしれないが、それはこれらの語彙の意味がまったく同じであって、自分がそのすべてを万

遍なく同じように使っているという意味ではなかろう。もし、選択肢がまったく同じ価値を持つものであるなら私たちはその内の一つを選ぶ時、どれにしようかとつねに頭を痛めなくてはならない、というより選ぶことなどできないはずだからである。先の言い方は、自分が万遍なくすべてを使っているという意味ではなく、これらを使っている人がいることを知っていて、どれを使われても自分はそれを間違いだとは思わず、同じことを意味していると考え、ということのはずだ。

社会的なものとして存在する言語（ラング）には、確かに同義語は存在する。それは、何がしか形態に違いがある二つの語彙であればその形態（シニフィアン）の差異とともに必ずあるはずの意味（シニフィエ）における微小な差異を、言語共同体の中では、計測不可能なものとして捨象し、等価なものとして扱うということであろう。

ところが、言語を個人レベル（パロール）で考えるなら事情は違っている。社会的には等価値であると認められる言葉でも、同時に二つの言葉を経験することはなく、個人個人がそれらの言葉に遭遇した経験や使用した経験は、頻度においても、質においても違っているものであり、このようなものを反映した微小な意味の差異が必ずあるものだからだ。つまり、個人言語において、便宜上同義語と呼び習わしているものがあるとしても、それは個人言語間にそもそも存在している差異と同程度のものであると見なしているからに他ならない。すべてを等価なものとして、どれも万遍なく使っているというのでない限り、こういった言葉は同義語ではなく類義語のはずである。

話を戻すと、言葉の使い分けこそが目標とされているのであり、この実践的な基準を求めている学習者に、ただ類義語を示すだけでは充分ではない。選択肢というのは選べもしない等価値な項の集合ではなく、どんなに主観的な基準によってであれまず選ぶことができるものでなくてはなるまい。その基準とは、これまでの個人的な言語経験においてその語が出現した時の感覚的記憶かもしれないし、出現頻度の差だけかもしれない。普通、頻度が高いということがその項を選ぶ理由になるだろうが、逆に、出現例が少ない、あるいはほとんどないこともそれを選ぶ理由になる。「流行」の発生から消滅に至る一般的経過はこういう選択基準の使われ方を示している。

先に示した選択肢、「禅宗の偉いお坊様／禅宗の偉い坊さん／禅宗の偉い僧侶／偉い禅僧／高名な禅僧」から筆者は「高名な禅僧」を選んだ。その時考慮したのは、読む者が子供ではなく大人であること、この作文がひじょうに短い翻訳の物語だったため、長ったらしいものは避けることなどである。それから、時に皮肉な使い方もある「偉い」よりは音調も抑えた感じがし、一見意味がずれるようでも同じことを間接的に意味する表現（「高名な」という結果によって「偉い」という原因を表わす「換喩」）のほうが望ましいと判断した。

書き直しの前に添削者の脳裏に浮かぶさまざまな類義語や類義表現は主観的にはこのようになんらかの違いによって区別され、言葉選びの選択肢となっている。人によって違っている訂正、書き直しのヴァリエーションとこれに関わる基準の実例は、自分自身でも類

義語の使い分けを身に付けなければならない学習者にとって限定付きではあっても貴重な目安となるのは明らかだ。<sup>2)</sup>

#### 1.4 誤りの分析と連想

誤りかどうかの判断は感覚的に行えることも多い。しかし、迷う場合には文章全体の内容や言葉の組み合わせを見て判断しなければならない。また、誤りの判定を下し、抹消と書き換えを済ませた後でも、まだそれがどのような構造になっているか、それがどうして起こったのかを考えたりする。ある誤用パターンに関心を持っている場合は当然そうなりやすいが、上級レベルの作文であれば、特定の誤用パターンを単独で考察するよりも、それが出現した文章中の他のさまざまな誤用や文体特徴との相関性を測るような構造的視点を取ることが多いだろう<sup>3)</sup>。教師という職性から、質問としてなかなか出そうにないような言葉の問題でも、何かの折に話題となり解説する機会があるものだと思っていればそのようなことを考えるのが習性となるだろう。

まず、手始めに先程の例で考えてみよう。

##### ● 「お茶をコップに注いだ」

⇒ 「コップ」と「カップ（コーヒー・カップ／紅茶カップ）」のよくある混同も考えられる。

⇒ 日本語で「茶碗／湯のみ／コップ／グラス」における名称と用途が交錯していることで、

これらの語彙が定着しにくく、機会があればまとめて分類しておくことが必要だ。

茶碗 - ゴハン用	コップ - ガラスが多い
湯のみ - お茶用	カップ - 主に複合語を作る

##### ● 「友達に会えてうれしいでした。」

⇒ イ形容詞とナ形容詞の混同であり、「うれしかった（です）」と訂正する。

⇒ 初級クラスでこのような二つの型が日本語の形容詞にあることについて、直接質問はしなくても学習者が感じていると思える疑問がある。初級の教科書ではナ形容詞は「きれい」以外にほとんど出てこない。意味としては「うつくしい」と同じようであり、形態的にも、「たかい／やすい」、「あつい／さむい」などと変わらず「-い」で終わるのに、なぜか「きれい」だけが違うとされる。

⇒ 中級以上のクラスの学生がこの間違いを犯している場合、添削で一度や二度訂正されたぐらいではあまり気にせず、矯正できないことでもあるので、ただ二つの型があると公式的に扱うより何か付加的な解説が必要だろう。「きれい」は現在ではふつうひらがなで表記され、初級の教科書でも当然ひらがなで扱うだけだ。しかし、「きれい」の「-い」

が漢字の音の一部だと知っていれば、二つが区別される理由が理解しやすくなる。

うつくしい (美しい) - うつくしかった - うつくしく  
きれい (奇麗) - きれいでした - きれいに

- ⇒「華麗」、「端麗」、「秀麗」はそれほどでもないのに、「きれい」だけがかな表記で通されるほど日本語の基幹語彙となったことには音声的な座りのよさも条件として働いたのだろうか。
- ⇒「たかい／たかない／たかかった」、「きれい／きれない／きれかった」と活用を一本化して使う方言もある。
- 「日本の春画」と題された作文が提出されたが、書いてあることを読んでみると、日本人男性が電車の中でも喫茶店でも人目をはばかりることなくポルノ・マンガやポルノ雑誌を読んでいることに対する驚きを述べたものだった。言葉自体の訂正は「ポルノ／大人のマンガ／アダルト・コミック／・・・」から一つを選ぶだけだ。
- ⇒これらの語彙によって示されるものの説明や定義を与えることが必要だ。「春画」は主に江戸時代に描かれた性的な浮世絵などを意味し、現代の種々の雑誌に掲載される性描写の多い漫画は「大人のマンガ」とか「アダルト・コミック」と呼ばれており、性的刺激を目的とした写真、イラスト、漫画、小説を総称的に表わす語彙としては「ポルノ」が多く使われている。
- ⇒「春画」という語彙を使った原因として、どうしても介入してくる翻訳や辞書の問題がここにあるようだ。「春画はポルノである」なら、ポルノは春画である」。不注意な翻訳で陥りやすいこのような等式化に注意を促す必要がある。
- ⇒「春画／ポルノ／大人／おとな／オトナ／漫画／まんが／マンガ」といった語彙の選択には同義性とか単なる表記のヴァリエーションと言うだけでは終わらない何かがある。漢字、ひらがな、カタカナの表記や外国語のカタカナ書きに対する日本人の感性は文字を混合して使わない言語文化で育った者には理解しにくいだろうが、これを手段とする「異化」は日本語ではかなり一般的な現象だ。
- ⇒日本語についての派生的な知識として、このような話題だったらよく耳にする「ポルノチック」という造語がある。「ロマンチック」から語尾を借り、「乙女チック」、「マンガチック」と主にカナ3文字の言葉でさまざまに作られる。
- ⇒「春画」の語義説明を超えて、日本文化の話題として浮世絵、あるいは江戸時代の出版文化を取り上げることもできる。

このように添削に関わる解説から、解説の枠を踏み出して広がってゆく連想がある。印

象的、主観的な解釈<sup>4)</sup>とか、未確認なこと、論証できないことは時に取り止めなくいくらでも湧いて出るものであり、ある種の倫理感から抑制が働き、公言されないのだ。いいかげんなことを言わないというのは、客観的に認められる、あるいは大勢が同じように考えていることしか言わないことだが、そうすると自分一人しかそう考えていないのではないかと思えることが公表されなくなりやすい。一般に、何か言葉について説明してもらったのだが物足りなく感じるような時、その説明が個人的な印象や主観的な解釈を一切交えようとしないことが原因と思えることがよくある。言葉について何か知りたいと感じる時、心の底で求めているものはただ間違いがないだけの客観的な事実ではなく、リアリティがあって感覚にも訴えて来る主観的な情報であるようにも思える。辞書、特に外国語の辞書を使う時、客観的で抑制のきいた語義説明からなんとかその言葉の持つ感覚を解釈しようとすることも多いが、それは言語能力というものが、客観的な知識としてあるのではなく、語る主体、書く主体となるためのものだからであろう。

## 1.5 全体性と文体

添削する者が作文を読んで何かを感じたり考えたりするのは、なにも朱を入れ、書き直すところだけではない。朱を入れる必要がないと判断したところについても文字で表わさないだけで、実際にはさまざまなことを感じたり考えたりしている。

誤りではない表現も場合によって書き直してみるような方針を方法として選ぶことについては先に述べたが、朱書きをしていない部分となるとそこにはなにも問題がないのかと言うとそうでもない。小規模なものでは、誤りの画定について述べた際に例示したように、誤りが特定の言葉にではなく、言葉の組み合わせ方にある時、その誤りの所在を朱による抹消で明示することはできない。ある抹消の原因がそこにではなく、少し離れたところにあることも多いし、一つの抹消箇所に多くの手付かずの言葉が関わっていることもある。

結局、文章を読んで何事かを考えるなら、その文章全体をなんらかの形で視野に入れているものだということであり、そのレベルにおいて固有の価値となるのが「文体」である。添削において表面に現われている朱による書き込みはいつでも「部分」に対して行われている。その書き込みに他の部分や「全体」が関わっていたとしても添削はそれを記すことができない。

前段では、文レベル、単語レベルの例しか見なかった。次に、文章レベルではどれぐらいの解釈と連想が実際行われるかを見てみよう。文同士が相互に文脈となって支え合っている文章のレベルでの添削では、その次元でしか見えない問題もある。

### 添削前 耐えられない事

先日は、勉強する気がなかったのでテレビを見ることにした。チャンネルを切

りかえる時、特に一つのプログラムが目をつけた。これは旅行のドキュメンタリーで魅力的な若い日本人女性二人がテレビ視聴者にバンコクの観光名所を紹介していた。

私は、タイの美しい景色やおいしいそうな料理を見て楽しんでた。その時ふつと耐えられない事が起こった。一人のレポーターは話し始めた。実際に、この場合は「話す」という言葉が不適切なのだが、彼女はきんきん大声で話したり五才の甘やかされた子のように振る舞った。彼女の声は私を縮み上がらせた。

なぜ、こう言う事をする日本のレポーター、特に女性のレポーターには、多いだろうか。この事は日本人には気にならないかも知れないですが、ほとんどの外国人から見ればこのような幼稚な振る舞いは恥をさらす事で耐えられない。

こう言う振る舞いをする人はテレビのレポーターだけではなく、店の人にもいる。選択ができるなら私はロボットの声を聞くほうが良いと思う。

#### 添削後 我慢できないこと

先日、勉強する気にならなかったのでテレビを見ることにした。チャンネルを切りかえていた時、ある番組が格別目をつけた。それは旅行番組で、魅力的な若い日本人女性二人がバンコクの観光名所を紹介していた。私は、タイの美しい風景やおいしいそうな料理を見て楽しんでた。その時急に我慢できないことが起こった。一人のレポーターが話し始めた。実際は、この場合は「話す」という言葉は不適切なのだが、彼女はキンキン声を出したり五才の甘えっ子のように駄々をこねたのだ。彼女の声を聞いて私はぞーっとした。

なぜ、こういうしゃべり方をするレポーター、特に女性のレポーターが日本には多いのだろうか。（こういうことは）日本人には気にならないのかも知れないが、ほとんどの外国人から見れば、このような幼稚なしゃべり方は恥ずかしいことで見られない。

こういうしゃべり方をする人はテレビ・レポーターにだけではなく、お店の店員にもいる。コンピューターの声とどっちを取るかと言われれば、私はコンピューターの声を聞くほうがまだましだ。

この作文を添削をしようとした時、どれだけのことを考えるだろうか。順に見てみよう。

- (1) 「先日は」では、助詞なしの「先日、」が適切だ。しかし、「先日、」／「先日は」の使い分けはどう扱えばいいだろうか。「先日は」は「先日はどうも失礼しました」のような定型表現でしか使わないように感じられる。これはもっと一般的な問題と関わりがあるようだ。外国人の日本語では、例えば、「先週水曜日、」ではなく「先週の水曜日に」が、



「朝、」ではなく「朝に」が使われやすい。それは助詞のような文法機能を持つものは明示するほうがいいはずだという外国語学習者に共通の姿勢からである。特に時間表現で助詞を付けるか付けないかの選択はなかなか難しいだろう。

時間の指示では、「日曜日」なら「日曜日に」／「日曜日には」／「日曜日は」／「日曜日、」というふうに、どれも「ハイキングに行きました。」と接続され用いられている。これに対して、「先日」では、同じように「日」に関わってはいても、「に」／「には」は使われない。「先日、」／「先日は」の二つである。

この作文でもし「日曜日」が使われていたなら、4つの選択肢のどれを選んでいてもいいのだが、「先日」の方では「先日、」が標準であり、「先日は」を定型表現ぐらいでしか使っていないとでも説明するしかあるまい。

ところで、書き直しを最小限にしようとするなら「先日、」でいいのだが、日本人がもっと頻繁に使っており、助詞使いも同じである類義語の「この前、」／「この間、」は、携帯サイズの外国語-日本語辞書ではなかなか出てこないこともあって、「先日」と並ぶ選択肢となっていない場合が多いので紹介したほうがいいだろう。

- (2) 「勉強する気がなかった」ではこれでもいいのだが、たいてい選択肢としてこれと比べられる「勉強する気にならなかった」のほうが「勉強しようとした」ことが暗に示されるので日本人の心理傾向として選ばれ易いと思える。
- (3) 「チャンネルを切りかえる時」は、「切りかえる前」に近い意味になり、続く節と文意が合わない。「切りかえる時／切りかえた時／切りかえている時／切りかえていた時」で違ってくる状況を対照しながら示す必要がある。
- (4) 「プログラム」は日本語でもカタカナ表記で用いるようになっている言葉である。いろいろな催し物の内容となるものについては、ほぼ標準的な語彙としてつかわれているが、テレビを話題とした場合、現在でも漢字語彙の「番組」が標準であり、せいぜいテレビの司会者が雰囲気をもっと飾る意図をもって使うぐらいだろう。
- (5) 「目を引いた」は、広い視野にいろいろあるものの一つが視線の方向を変えさせるというような場合でなければ使えない。つまり、視線を一定にしたまま次々と切り変わる画面を漫然と見ていて、興味を持ったものを他よりも長くじっと見たような場合には、「目を引き付けた」がふさわしい。
- (6) 「ドキュメンタリー」のように外国語をそのままカタカナで用いる語彙は、原語での意味領域よりも拡大していたり、縮小していたりするが、それまでに用いられていた語彙と棲み分けすることが多い。日本のテレビ文化の中で頻繁に放送される観光旅行意欲を煽る目的の番組は単に「旅行番組」としか呼ばれていない。
- (7) 「おいしいそうな料理」では、「おいしい／おいしそう」の区別だけではなく、「おいしいそうです／おいしいらしいです」も比べておかなければ使い分けが定着しにくいと思える。

(8) 「ふっと耐えられない事が起こった」では、「ふっと（ふと）」を「急に／突然」と置き換えれば添削は済むのだが、「ふと急に／突然ふと」と同義的に用いられるはずの「ふと」がどうしてもここではいけないかも問題になる。

「ふと思った」とか、「あの夜のことがふと思い出された」、「ふと立ち止まった」を例として、「私」について、あるいは「私」を移入できるようなものにだけに用いられ（語学勉強のためによく読まれる小説作品では、語り手の「私」が三人称の主人公に意識を重ねたり、語りの視点を置くことが多い）、事物や出来事について用いられることはない。

(9) 「きんきん大声で話す」は「キンキン」のほうが鋭く、耳障りに感じられるせいか、よく使われている。また、「キンキン声」、「声を出す」という表現も頻度が高い。

(10) 「甘やかされた子のように」では、これを文法の使い方が正しいからといってそのままにはしておけまい。明らかに、標準的な用法からははずれているからである。かと言って、「甘えん坊／甘えッ子／駄々っ子」などと置き換えただけではこの元の表現がどのような負の要素を含んでいたのか理解されようもない。英語などのように「親が子供を甘やかす」における「甘やかす」という意味の語彙しかない言語と違い、「甘い」から「甘える／甘やかす」が作られている日本語では語形成自体の簡略さから言って、「甘える」が選ばれやすい。日本人論で指摘される「甘え」まで話を広げる必要はないが、「親に甘える子」のような句形成では用いられる「甘える子」は単独では用いられず、「甘えん坊／甘えッ子」が定着していることは知らせるべきだろう。また、これと一緒に使う言葉としては「のように振る舞った」よりも「駄々をこねた」が連想されやすい。

(11) 「・・・た。・・・た。・・・た。・・・た。・・・た。」では文章が単調になる。これぐらいの数の文が続く時にはどこか一つぐらい内容から見て強調したほうがいい文があり、「・・・たのだ。」とごく簡単に変化をつけることもできる。

(12) 「振る舞った」には「話し方」が含まれない。また、「話し方」では内容もちゃんとした「大人」の伝達行為のように感じられ、ここにはそぐわない。「しゃべり方」なら口先だけの大した意味のない会話と感じられる。

(13) 「彼女の声は私を縮み上がらせた」も、(10)と同様、文の形成に使われた文法は正しいのだが、それはあくまで翻訳文体としてであることを理解させるべきだろう。構文は物主語ではなく人主語が日本語の標準なので、「私は彼女の声に縮み上がった」が適切だ。また、「彼女の声に」は「に」だけで充分とも思えるが、日本語の慣用としては、「彼女の声を聞いて」のように知覚動詞を表わすほうが一般的だ。そして、「縮み上がる／縮み上がらせる」は語義が明瞭なため学習者の用いる辞書にはこちらの方が優先的に紹介されやすいのだが、日本人の言葉選びから言って、類義表現で、感覚的な「ぞーっとする／ぞーっとさせる」がこのような場面では選ばれ易い。

(14) 「こう言う事」は現代の表記傾向として漢字を使わない。

- (15) 外国人は「日本の～が多い」を使いやすいようだが、日本人の言葉遣いとしては、「日本には～が多い」だろう。
- (16) 「この事」では指示が強く感じられたため、すこしばやかした「こんな事」の方が多く使われる。
- (17) この文章は「だ調」で書かれているので、統一をとるためには「知れないですが」ではなく「知れないが」を使う。
- (18) 「恥」に関して出やすい言葉は文形成の「恥をさらす」、「恥をかく」よりも形容詞の「恥ずかしい」だろう。
- (19) 「耐えられない」は深刻なことについて悲しみの感情を伴う時に使われる。ばかげたことに対して怒りを覚えたような時には「がまんできない」だろうが、そのどちらにもまたがる場合なら、「見て（い）られない」ぐらいが普通だろう。
- (20) 「店の人」はどの店のことが分かっているような時しか使わない。一般概念として表わす場合には「店員／従業員／売り子」などがあり、最も使われるのは「店員」と思えるが、文字で示す場合には単独でいいが、会話の中などでは音が短すぎて不明瞭になるせいか、冗長ぎみに「お店の店員」という言い方もよく耳にする。
- (21) 「ロボットの声」では、機械的な音声がSF映画の人型ロボットぐらいしか発していなかった時代にはよく使われたが、べつに人間の姿をしているわけではないコンピューターがそこらじゅうに溢れ話している現在では「コンピューターの声」のほうが一般的だろう。
- (22) 「選択ができるなら」は簡潔すぎて論述的だ。普通には「どっちを取るかと言われたら／どっちがいいかと聞かれたら」だろう。
- (23) 「ほうがいい」ではマイナスの感覚が出にくく、「ほうがまだいい」か「ほうが（まだ）ました」を使いたい。
- (24) reporter は「レポーター」と英語の読みにローマ字読みを混ぜたものが使われてきたが、最近、聴音に近づけた「リポーター」が多くなっている。

## 2.0 解釈される添削文

添削をする者が作文を読んで行う解釈、これは添削という作業に含まれるものとして忘れられることはない。しかし、作文に関わって行われるもう一つの解釈、こちらはあまり注意されていないようだ。

作文に関わるプロセスとはどこまでかと聞けば、たいてい、添削までだと答えるだろう。学習者に返却されれば、後は、学習者個人個人の問題であり、学習者は朱で書き直されたところを読み直せば、自分の言葉遣いの誤りがどんなものであったか分かるはずだ、こう考えるわけだ。

しかし、作文に施された添削を見て、果たしてどれぐらいのことを学習者は理解しているのだろうか。添削者が元の作文を読みながら感じたこと、考えたこと、また朱による書き込みで意図したことがそっくり伝わったりするとも思えない。

添削は確かに作文のフィード・バックとして行われるのだが、一旦返却してしまうと普通それっきりで、書き込みの意味がどれだけ理解されたかが確認されることは残念ながらほとんどないようだ。

書いても書いても作文が添削されず、書き捨て同然になるなら、この練習にたいした学習効果を期待することはできない。一方、添削されるにしても、学習者がそれを返却された後、何がチェックされたのか、書き込みがどういう意味なのかをまったく気にしないなら、やはり書き捨て同然ということになってしまう。

訂正された箇所はその理由をよく検討し、必要な語彙や表現は完全に覚える努力をするのは言うまでもないが、疑問に思うことがあれば添削をした教師に説明を求めるべきだろう。

添削後に必要なことが行われないとすれば、教師が作文に添削を加えたことにほとんど意味がなくなってしまうだろうし、そもそも学習者が練習として作文を書くことに意義を見い出せなくなる。

作文を書かせ、それを添削すると言うなら、これによる最大限の学習効果を目指すべきだし、そのためには添削をする教師が添削という直接作業を超えて、これに関わる過程全体、特に返却した後のことを常に視野に入れていなければなるまい。さて、添削文、これを学習者はどう読むのだろうか。

## 2.1 誤り箇所の画定

朱による抹消の仕方は何通りもある。抹消が最小限で済むように、使える字句は極力残して書き替えることもあれば、後で読み返しやすいうように、部分的な誤りであっても文ごと書き替えることもある。**2.2 誤りの判定と画定**で述べたように誤りと抹消はぴったり一致するものではない。抹消箇所自体に誤りが含まれていると扱える「局地型」のものもあれば、その内部には誤りはなく、抹消されていない他の要素との組み合わせが誤っている「関係型」のものも多くある、いやこちらの方が多いぐらいだ。

ところが、抹消の仕方にどんなに工夫を凝らしてみても、どうしても局地的にならざるを得ない抹消で「関係型」の誤りを表わすことができるはずなく、学習者が単純に抹消箇所そのものが誤りだと判断し、「関係型」の誤りを「局地型」と勘違いする可能性はきわめて高い。抹消と書き込みをするだけで学習者がどこに誤りのポイントがあるのかを解釈できるだろうなどと思わないことだ。

## 2.2 誤りの原因

どこに誤りがあったかが分かった、あるいは、勘違いの場合もあるだろうがその誤りがどんなものであるか解釈できたからといって、それで終わるようでは困る。どうして自分がそんな誤りを犯すに至ったのかを考えるようであればなるまい。どんな誤りでも原因を同じくするものは多いものだ。従って、たった一つの誤りでも、それが適切に分析、理解できれば、以後犯す可能性のある誤りの根を断つことになるということを学習者もわたしたちも忘れないようにしたいものだ。学習能力が高いということはこのような思考をいつでも自然と行えることであろう。

## 2.3 誤りによる内容伝達の障害度

誤りがあったとして、その誤りでどれぐらい内容の理解が妨げられたかを考える学習者は多い。言葉の学習においては重要な表層部の意味機能に対して充分注意を向けている学習者なら当然、意味不明だったのか、それとも誤ってはいても内容は十分に理解できるものだったのかを気に掛けるものだ。このようなことを考えようとしないなら、内容が伝わればそれでいいのではないかと考えていることになり、文章を書く練習をしても学習の焦点がずれているわけだから、学習効果が期待できない。時には、ささいな誤りでも意味がまるで違ってしまうことがあるように、誤りにはやはり軽重がある。

## 2.4 誤ったことば自体の印象、評価

副次的なことだが、内容の理解とは別にそのような表現がどのような印象を与えるものであるかも学習者はよく考える。粗野、無礼な感じを与えないかと「文体的」な気づかいをする場合もあるだろうし、誤りの頻度や質によっては自分自身の能力が低く評価されるのではないかと気にする場合も多い。効果的な練習として作文を勧めても、なかなか書こうとしない一番の理由がこれだ。間違えると恥ずかしいと感じることは自然なことであり、これを避けようということで学習の動機ともなりうるが、そのために効果的な練習をしなくなるようなら、言葉の学習において間違え経験が重要な意味を持つことを納得させなければなるまい。

## 2.5 抹消されなかった言葉

添削によって朱書きされた部分に反省のための視線が向けられるのは当然であるが、朱書きのない部分が一切解釈されたりしないのかと言えば、そうではない。

添削を受ける前には、自分が書いた文章のどこが普通で、どこがおかしいのかは書いた本人には分からない。これが添削を受けて、朱書きされた部分とその朱書きによって間違いという刻印を押されことになる。他方、朱書きされていない部分にしても朱書きされな

かったことによって何かを告げるようになる。手付かずであっても添削前と情報価は同じではない。

付加情報と言っても間違えていないことが負の指標によって示されているだけではないかと思うかもしれない。しかし、添削を読み返しながらか、当然のごとく文章中に書き加えられた「誤り」の訂正箇所にはばかり目が留まり、解釈を行っている間に、同時進行していると言えるような解釈もある。

添削をする者が正誤の判定に迷う場合も少なくないこと、また、正しい文であると判定していながらも、分かりにくいとか、好ましくないとか、まさに主観そのものと言える感想を表明しないままでも抱いているはずだということを先に指摘していたが、今度は、作文を書いた学習者が一人合点し、陥ってしまうあまり望ましくない解釈だ。

誤りなし → 正しい → 日本人と同じ → 使い続けるべき

添削者による抹消も書き換えもない、当然これは誤りが無いのだと理解される。誤りが無い、つまり正しいものだと日本人が判断したのなら、それは日本人も同じ言葉遣いをしているということだろうと考えて不思議はない。そして、言葉遣いが正しいということはその用法についての自分の理解も正しいことを意味しており、当然、自分がその表現で意図した内容を正確に表わしているはずだ。だから、その言葉遣いは今後も使い続けてかまわない、あるいは使い続けるべきだと解釈が延長されうる。果たして、これをそのままにしておけるだろうか。

### 3.0 あとがき

わたしたちは読んでいる時考える。言葉の向こうにある内容だけではなく、言葉そのものによって表わされている思考や感覚もである。言葉の端々から書いた人がどのような意識、心理の持ち主なのかを感じ、どうしてその言葉が表われたのだろうかを考える。

小説や詩の研究では、表わされた言葉がどんなものであるかを考える糸口となるのは、自分の意識に喚起されたものであったり（印象批評）、作家の実人生や他の作品との関わりだったり（伝記的、実証的批評）、あるいは「作品」という有機的に機能する構造の徹底的な分析であったり（テキスト批評、構造文体論）する。外国語学習の一環として行われている作文をそこまで徹底的に分析することはまずないのだが、添削を行っている時にわたしたちの脳裏に浮かぶものは文学研究の場合と似ていなくもない。一つの言葉が表われたことの意味を厳密に知ろうとした時、どれだけの分析、解釈を積み重ねなければならないのだろうか。どこまで行っても自分が言葉を使っている時の感覚や意識ほどのものが理解できるわけではない。言葉について説明を行うこととはどういうことだろう。自分が書い

たものではない文章に対して行えることは解釈以上にはならない。書いた者（作家、学習者）が一つのことばを使う時にどんな感覚を持っていたか、どんな選択肢からそれを選んだのかまで解説することができるはずはない。

一方、学習者の目標がただ読んで内容を大まかに理解する受動的な能力ではなく、教材として読んでいる文章を書いた者と同等のことば選び、言葉遣いができる能動的な能力であれば、そのような能力がどのように働くものかを間近に観察できる機会があるほうがいい。教材となる文章を書いた本人が解説をし、文章そのものには書き込み得ないことば選びや感覚について話してもらえば理想的ということになる。その場で文章を書いてゆきながらその時々意識に上る感覚や思考をすべて語ってもらうなら、究極の解説となるはずだ。しかし、こんなことが望めるはずがない。

これに多少なりとも似たことができれば我慢するしかない。間違いの訂正に留まらず、添削者が読んで解釈、理解した内容を自分自身の文体と言えるところまで書き直せばどうだろう。これならそこで必要となったことば選び、言葉遣いが主体的に解説できよう。正誤の判定だけではなく判定の迷いも、どんな選択肢から何を規準に選んだのか、どんな感覚が伴い、どんなことが連想されたのか語れるはずだ。元の文章の誤りや不適切な表現、文体の表現効果（外国人なまり、翻訳文体、無礼な印象、敬語丁寧語の過剰感など）も添削者自身のことば選びの延長として扱える。

解釈の限界を知れば、それによって新たな可能性が見えるように思う。

## 注

- 1) 「作文」を「読む」／「書く」技能の位置づけと展開、『留学生日本語教育』、第4号、広島大学留学生センター、1992年。  
中川正弘、作文の誤りと文体、広島大学留学生センター紀要、第3号、1993年。
- 2) 言語の2つの軸、つまり**選択軸／結合軸** (sélection / association) の対立を踏まえてだが、言語能力において**選択** (sélection) は2つのレベルで捉えねばならない。一人の人間が言語 (langue) 内に存在するすべての**同義語** (ヴァリエーションとしての方言も含めて) を用いるわけではない。まず、経験の限界によって既知の類義語集合、つまり理解可能な類義語の集合が得られる。この中から自分が用いる類義語の小集合が選ばれる。これが個人言語 (parole) におけるまず**第一の選択**である。そして、この固有の選択肢から発話においてただ一つを選ぶ、これが**第二の選択**である。ソシュール (Ferdinand Saussure) が sélection / associationと「行為」を表わす語彙を用いたということは、明らかに静的で潜在的な体系としての言語 (langue) ではなく動的で実践的な個人言語 (parole) をにらんでのものだったはずだ。しかし、それが言語の社会的側面にのみ注目する研究立場からparadigme / syntagmeと置き換えられてしまうと、本来の行為的意味合いは消えてしまい、静的体系としての言語 (langue) 内にまるで2つの軸があるかのように言うことになる。そして、さらにこれが類似性 (analogie) による関係

軸と隣接性 (contigité) による関係軸とまで言い換えられてしまえば、交差するというより、ただ共存しているだけのように感じられる。言語能力における行為としての**選択**の意味を見直すことが必要と思える。

中川正弘、**文法におけるパラダイグムの諸相**、広島大学留学生センター紀要、第1号、1991年参照。

- 3) 特定の誤用パターンを多数の学習者の例を集めて分析する研究が多いようだが、表面上は同じパターンを示しているにもかかわらず原因がまったく違っている誤用もよくある。従って、誤用の原因を厳密に分析しようとするなら、それが出現した作文などのテキストの構造分析を行い、同じ文章中の他の誤用や文体特徴との共鳴など、相関性を考察することが必要だろう。

長友和彦、**誤用分析研究の現状と課題**、広島大学留学生センター紀要、第1号、1991年参照。

- 4) 文学研究において厳密な作品分析を行おうとするなら、一部の断片的要素のみからの論証や、主観による評価、解釈は当然避けねばならない。「文体論」、あるいは「文体学」と立てられた視点はその根本にこうした厳密さへの意志を抱いている。例えば、厳密さを欠いた批評や作品分析の誤りを検証することでシュピッツァーは作品研究を緻密なものとし、さらに、作品を有機的な意味構造と見なし、書き手における意図と読み手における効果の検証までを行い、分析を限界まで厳密に行おうとするリファテールから見れば、緻密なシュピッツァーでさえ、解釈に主観が介入する「印象批評」だとされる。文学作品の研究においてはこれほどまでに排除されるのが当然の主観だが、ここで論じているような教授法、すなわち作文として現われた学習者の日本語を日本人である添削者の日本語と比較し、あらゆる差異を検討することでより高次の理解を目指している場合には事情が違う。この場合には、ある意味で学習者と添削者の主観と主観を対照すると言ってよく、たとえ根拠の薄弱な解釈、感覚的な印象であっても、それを客観的なものと粉飾せず主観であるという限定付きのまま扱うならきわめて有用な情報となりえる。一般に学習者の目指しているものは能力としての個人言語であり、言語の客観的な分析や知識はしかたなくそこを経由しているだけと言った方が正確だろう。この能力としての言語は感覚と結び付き、徹頭徹尾主観によって構成されているものだ。

Spitzer, Leo - *Études de style*, Gallimard, 1975

Riffaterre, Michael - *Stylistique structurale*, Flammarion, 1972 参照。